



堀田善衛全集 1

筑摩書房

堀田善衛全集 1

一九七四年六月二〇日第一刷発行

著者 堀田善衛

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区袖田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一(代表)
郵便番号一〇―一―九一
振替東京四―二二三

印刷 明和印刷株式会社
製本 和田製本工業株式会社

堀田善備全集

1

目次

詩 篇

今宵何を語らう……

祈 り

挽歌——みまかれる美しき詩人に——

明るく歌のやうに

高 原

水のほとり

故 里

瀉の風景

朝

断 章

しづかに雪が

今 日

14 13 13 12 10 9 9 7 6 5 4 4

暗い夜道で

戦争

野辺

夕照から

風

無題

哀歌

白鳥

序の歌

ジエスフィールド公園にて

天の誘ひ

暗黒の詠唱と合唱

沈黙

Nel mezzo della nostra vita……

14

15

16

17

18

18

19

20

21

24

25

26

30

31

海 景

現代史

庭

冷いなぎさ

二十歳

高岡大仏寺の写真に寄す

モスクワデ

毛皮ヤ

マドリッド

コロンボ

岬の墓

黄浦灘花園にて——一九四六年春・上海——

M……嬢に——一九六二年冬・モスクワ——

風はどこから吹いて来る——伏木中学校の歌——

32

33

35

36

36

37

37

38

39

39

40

41

42

43

小説

或る公爵の話

国なき人々

祖国喪失

波の下

共犯者

暗 峽

彷徨える猶太人

祖国喪失

被革命者

十二月八日

捜 索

夜来香

齒車

広場の孤独

漢奸

断層

潜函

燈台へ

影の部分

『広場の孤独』あとがき

『祖国喪失』あとがき

解説 典型的人間、典型的文学者
解題

大江健三郎

240

293

363

394

408

422

458

479

480

481

495

詩篇 祖国喪失 広場の孤独

他

詩

篇

今宵何を語らう……

町中は憩ひにつき、明るかつた通りは静かになつて、
白い花が夕暮れの紫いろにういてゐる。

私は帰つてゆくのだらうか、見なれぬ寂寥と

悦びを抱いて、ただほのかなぬむりをもとめて。

道をはづれ、私は森のなかへ入つた。今宵、

うすぐもりの空のひとつの星にむかひ、私は

何を語らう。——感謝するがいい、

おまへはのけ者ではなかつた、これらの自然と何の変りか

あるだらう。

夜にも伸びてゐるやはらかい夏草が頬に触れ、

さはやかな風に梢はそよいでゐる。ねむりのなかにも

虫のなき声はしみ入つてくる、遠いはるかな昔の歌のやう

に。

かうした夜、せきあげてくるものをとめてはいけない。

しばしの憩ひはあの月影がまもつてくれる。

名も知らぬ雑草さへたのしげに囁きかはしてゐるではない

か。私に

どんな名があつたらう。草は私を通して伸びあがる。

さうしてあたたかい晩春の風にきよらかな花が散つてゆく。

散る花の、散りぎはの一声の叫び。それはかつて私の嘆き

であつた。

だが散るがままにまかせるといい。花のねがひは

叶へられたのだ。誰も見ずとも、忘れられても、夢のやう

にも。

澄みきつた月にむかひ、今宵私は何を語らう。

祈り

見なれぬ場所へ 不意に

出たひとは眺めまはす そこらに

見知つたものはないか と そして

つひになにかをきつと見出すだらう……

ああいまし樹を離れようとしてゐる あの無花果は

あれは見たことがある 十二の秋に と――

そのやうにそのやうに たましひの幼な子は
領きあふであらう 手をとりあふであらう

大きなめぐりを迎へたやうに

われらは深みでひとつである と はじめから――

眼ふせ それをいはずに……

するとそのしじまのなかから

羽搏きの音が起るであらう

たましひは眼を覚すであらう すべて新しく

家々はみな 違つてゐながら

似通つてゐる ひとが住むやうに と

愛も死も夢も 四季の自然も

見なれぬままに ひととは知つてゐる

静かな夕暮れの時間のうちに

それらのすべてを

そしてひとは忘れる 朝の時間に

それらのすべてを

限りなく新しく 限りなくなつかしく

われらの生は 孤独の深みでなんと広いのだらう と

挽 歌

――みまかれる美しき詩人に――

あなたがのこしていった 雪の上の・

足跡は 意外に意味が深かつた

月の光を浴びて 長いこと 私はみつめた

乱しもせず乱れもせぬ 虔しやかな足跡を

いつてしまつた 沫雪のあちらには

もう春が 訪れてゐたのであらう 私は聞く

いまは翳のない 軽いきよらかな歌声を

うら若くしてみまかれる旅人よ

ゆくりなく出会つた のではあつたが

いま いまはないあなたとさへ……さう

私は一度別れようと思ふ 別れるときの

感謝の心で 面影はとほに忘れぬままに

*

*

*

別離をゆるされた あ冬の夜こそ

あなたの歌は しかし却つて深く私の胸に

届いたのであつたのだ——時は移り

ああ移りの秘密の中に いとなまれ 生きてきて

私は眠りのうちにやつて来てゐた 五月の森に

かうばしい日の匂ひにはぐくまれ

かはされる若葉のことばで 私は眼覚めた

(さびしい歌が歎びにみちびいた——)

美しい時よ 木洩日のさした林の中は

永遠に朝であらうか!

そして迎へたよみがへりに 私は知つた

別れたのでは なかったと——

明るく歌のやうに

頭をあげて 遠くのぞめば

あけぼののやうに ぼうと明るかつた丘——

僕は身だしなみをして 言つた

『あそこだいいいよの丘 虔しくあれ僕の魂よ!』

来てみれば しかし薔薇いろヒースの咲く丘だつた!

おだやかな空の下で 僕は花束を編む

『僕には 何が 要る?』

『僕には 何が 要る?』

僕はたしかにどこかで道を間違へた

きはめて正當に 誰もがそれとは言はなかつたが

哀歎の最終の親しみで

あの日の童話が 真面目に告げた

ここにわが幼年時代終る……

丘の頂きに立ち上り 僕は読む

茜に輝き流れる雲に そのうらに

別の空の来ることを

移りゆく あの空とこの空とのいりまじるそのなかで

僕は信じる 自然のやうな歳月を

空よ もうおまへは僕の外にはない

さうして僕のどこに内があつたらう

なにかが僕のすぐそばで 身を傾けて
言つてゐる 信じることは聞くことだ
何気なく立つてゐる 樹々の凜とした姿よ
いつ樹々が寂寥を言つたらう

高 原

(一)

小檜やかへで 白樺 朴
そして樺などの若木は
その隅々まできつちりと
生気を漲らせた葉をすぐつて茂らせ
一点の蟠りもためらひもなく
暢びやかに旺んに
いまにも舞出でさうに伸び上り伸び上り
日の光はかれらを酔はせ匂はせ 山腹は
かれらの若い私語のこぼれにみちてゐる——
……それらの浅みどりの微光につつまれ
私は 登つた

頂きに近い 尾根の榎松はしかし
嵐に頭を折られ 裂かれ
群叢を抜きそびえたつたものの孤独と
闘ひの痕をのこし悲壮の姿で立つてゐる
立つてゐる その下蔭には
——この山が白くなり 青くなり
また白くなり 青くなり……
涼しく光つた風が梢を揺すつて流れ
旗のやうな雲がなにかを合図してゆく
——私は何を見てゐるのか？

不意に 私は出た 山上の湖へ
(いつの間に どうして?)
しかしいつか雨風に雨衣は小さく破れてゐた
雨は去り霧のみ慌しい空の下に見出た碧い湖——
それはひそかに隠されてゐた
つひの憩ひのやうに深く深く湛えられてゐる
誰が囁きかけるのか……
『怖れなく 湖をさしのぞけ!』とは

湖は 沈んだ心には暗い

(光はいづこに?)

ああさうだ光へのねがひによつて湖は

怖ろしい淵を深みへとおし沈め

暗さのすべてを静かにふまへ休へてゐるのだ

そしていま 青空の下で 水面は清らに澄み

汀の漣は朽木と戯れさへ……してゐる——

だが——しかし高原に寥しい荒天が襲ひかかる時

湖は 森の獣をまきこみ殺しさへもする

憂鬱の霧を吐き漂はせ 深く暗く沈んでゆく

音もなく ここ冷えびえとした大気の裡では

すでに遠く流されてしまつた泪さへかわくのだから

——私は何を 見てゐるのか?

(一一)

河底の小石のやうに茜の色に耀いた

翳雲の流れの下で

風の下で 冷雨の下で そして吹雪の時に

また朝日が霧の中で輝き物狂ふ時

高原は 一人静は 椴松の樹はいかに……?——今

若みどりのうひうひしい羊歯の原はひろがり

ところどころに杜若の紫は点々と

何気なく事もなく美しく咲いてゐる

点々と 咲いてゐるのだがしかし

大空に地に老いと若さと朝と夜とを大きくめぐり

めぐりゆく自然のうちに立つてゐる

ゆく時の今に立つてゐる

私の身体 私の心——

私とは……なに——?

『ひとりの歌は 消えてもよい?』

『何故に?』 『何処へ?』 ……

流れ逝く溪流の音を私はきく

そこにすべては 語られてゐるのだ

激しくもながれ来て 踏み切つたその時の

滝の落ち際の安らかさよ

飛沫はむしろ夢のやうにおちてゆくのだ……

(一二)

日は暮れた 一夜の宿りに

伸べられた床に横はり

ゆらぐ蠟燭の火を 私は 見つめる

けふの日の一日 いな昨日 そしてまた明日

歩きつづけて来た足は身体は